

イギリス科ニュースレター

September 2017

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8号館 402号室) TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

Web: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

主任挨拶：西川杉子

2017年度主任を務めることになりました西川杉子です。2012-13年度に引き続き2回目となります。よろしくお願いいたします。

昨年度のニュースレターでは、アルヴィ宮本なほ子先生が学内の変化について言及されていましたが、過去一年を振り返ると、なにより私たちが研究対象としているイギリスそのものの変化に驚かされます。いわゆる「ブレグジット」、EU離脱の決定から、EUとの関係、難民問題、IS関連とされるテロ、悲劇的な高層住宅火災とその後の混乱と、ここまで状況が急速に悪化するとは数年前には想像できたでしょうか。特にイギリスの知識人は事態を深刻に受けとめているようで、私の知り合いのなかにも他国の国籍取得を真剣に検討している人が出てきました。

それはともあれ、近世イングランド史を専門としている者として印象深く思ったのは、「ブレグジット」決定以来、イギリスのメディアで急に「ブレグジット」と16世紀のイングランド宗教改革を重ねる言及が増えたことです。実際は、宗教改革によってイングランドはプロテスタントのヨーロッパ世界と深く連携していくことになるのですが、それよりも、国王の離婚によって開始されたローマ教皇を頂点に抱くカトリック世界からの離脱というイメージが、宗教改革像として一般的なのでしょう。宗教改革、すなわち500年前のブレグジットとされるわけです。EUへの分担金を離婚の慰謝料と表現したり、ヘンリー8世の国王至上法（イングランド国教会の成立）をイングランドの独立宣言と表現したりするのはその表われではないでしょうか。そういえば、私の母校ロンドン大学でも、この夏、宗教改革展を開催しているのですが、展示会の宣伝用タイトルは「宗教改革 ヨーロッパ的離婚」となっていました。いずれにせよ、現在の出来事の検討にも歴史のなかに参照を求めるとは、いかにもイギリスらしいと思います。

もっとも、2017年はマルティン・ルターによる宗教改革500周年なので、ブレグジットがなくても宗教改革がある程度はメディアで取り上げられたことでしょう。これまでも、1617年、1717年、1817年、1917年と100年ごとにイギリスを含めてヨーロッパのプロテスタント諸国は大規模な100年祭を催していますから、これから10月31日の宗教改革記念日に向けて、どのようなイベントが続くのか楽しみです。

今回の500年関連のイベントにおいては、過去の宗教改革祭とは大きく異なる傾向が顕著になってきています。それは、過去の記念祭では、ローマ・カトリックを批判してキリスト教内の対立を強調してきたわけですが、近年はキリスト教諸派の融和・和解を前面にだしているのです。昨年の5月にはローマ教皇フランシスコはプロテスタントのヴァルド派教会を訪問して過去の弾圧に対して許しを求めましたし、10月の宗教改革記念日には、スウェーデンのルター派教会大主教アンシェ・ヤケレン（同国初の女性大主教）と共に礼拝に参加しています。今年1月には、イングランド国教会の2人のトップ、カンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビーとヨーク大主教ジョン・センタミュが、宗教改革による分裂がもたらした災禍を悔いるという共同声明を発表しています。西ヨーロッパでは教会の影響力が低下していますが、それでも、混迷する現代社会にキリスト教諸派がどのように対応しようとしているのか、目が離せません。



今年度10月21日（土）に予定されているホームカミングデーですが、申し訳ありませんが、コモンスルールの開室はいたしません。どうぞよろしくお願いいたします。



新教務補佐の挨拶

(1)

松本佳奈子

本年度4月よりイギリス研究コースの教務補佐を務めております、松本佳奈子と申します。イギリス科の博士課程に在籍し、アルヴィ宮本なほ子先生のご指導を仰いでおります。G. K. チェスタトンやイヴリン・ウォーなどの20世紀イギリスのカトリック作家を中心に研究してまいりました。最近ではアメリカ研究コースのシーラ・ホーンズ先生のおかげでLiterary Geographiesという文学と地理学を融合させた研究にも興味を持つようになり、学際的な地域文化研究専攻に進んでよかったと改めて思っています。また、翻訳の実践に興味があり、山本史郎先生の研究会などで勉強させていただいています。

私は学部からずっとイギリス科にお世話になってきたので、こうしてコースの運営のお手伝いができる立場になって光栄です。自分が教務補佐の机に座っていると、歴代の教務補佐の方々を懐かしく思い出します。いらっしゃると研究室の空気が少し引き締まり、でも何でも優しく相談に乗っていただきました。自分もそんな風になれるのだろうか緊張しています。同期の友人や先輩方が卒業してからはついコモンスルームから足が遠のいていましたが、この仕事をいただいたおかげでまたコースのみなさんにご縁ができてうれしく思います。

私が学部生だった頃からはずいぶん経ちますが、新しい方々が新しい良さを加えながら、イギリス科の暖かく励ましあう雰囲気は変わらず続いていると感じます。コモンスルームには相変わらずお弁当やパソコンを持った学生が集い、テーブルの上には読みかけの研究書が積み上がり、誰かのお土産だろう外国のお菓子が置かれています。卒業生の皆さま方も、お忙しいとは思いますが、もしコモンスルームに遊びに来ていただければ、きっと楽しく懐かしい気持ちになっただけです。

自分の学部生のころを思い返しますと、イギリス科は本当に刺激的な学びの場でした。先生方の授業は難しくもおもしろく、びくびくしながらなんとかついていくやりのがありました。院生の先輩方は憧れの存在でしたし、学部生の私も勉強仲間に入れてくださってたくさんのお話を教えてもらいました。同期の友達はみんな個性的で自分の考えを持っていて、話が尽きず、今でも連絡を取り合うほど仲良くなることができました。自分がイギリス科からたくさんのお話をいただきましたので、現在在籍されている学生の皆さんにとってもイギリス研究コースが素晴らしい出会いの場所になるように、微力ながらお手伝いしたいと思います。

(2) 八代憲彦

この度、4月よりイギリス科教務補佐に着任いたしました八代憲彦と申します。現在、地域文化研究専攻の博士課程に籍を置いております。このイギリス科には学部内定生の頃より数えて足掛け7年お世話になっており、今では最も愛着のある教育・研究組織です。学部時代から小川浩之先生に御指導を賜っており、専門はイギリス外交史、冷戦史で、とりわけ第二次世界大戦直後の戦後復興を扱っております。学部の頃はイギリス帝国の移民に興味があり、卒業論文のテーマも移民政策を扱ったのですが、移り気な性格が災いしたのか、修士論文では外交史・外交政策が主要なテーマになり、今に至っております（今でも移民関連に関心を持ち続けてはいます）。現状ではこの場でご紹介できるほど自分の研究がまとまっておらず、今後まとめられるか不安な思いを抱きつつ日々研究しております。

教務補佐という仕事は自分にとって夢の一つでした。非常に優秀な教務補佐の方々（城座さん、澤田さん、加太さん、大森さん）に学生としてお世話になる中で、いつか自分も学生のサポートをする教務補佐という仕事を経験できればと淡い期待を抱いております。

そのため、先生方から教務補佐のお誘いをいただいた時には、想定よりも遥かに早期に夢が叶ってしまい若干戸惑い、またなぜ自分が？という疑問を抱きつつも、心の中で欣喜雀躍いたしました。シェイクスピアの『シンベリン』に“Fortune brings in some boats that are not steered.” (Act IV, Scene 3) という表現があるそうですが、思いがけない幸運というのはあるものだなと実感いたしました。

しかしながら百考は一行に如かずとも言えるでしょうか、思っていた以上に教務補佐という業務は大変でした。外から眺めていた時には気づけなかったのですが、大学の組織運営の大変さというのを日々実感しております（とはいえ、自分の力不足が原因で大変さが増しているような気もします）。また、その苦勞をおくびにも出さずに仕事をこなしていた諸先輩方の優秀さに改めて感じ入った次第です。

この文章を書いている時点で勤務を始めて既に4か月が経ちまして、仕事に少しは慣れたと思いますが、イギリス科にしっかり貢献できている気がいたしません。それどころか普段よりイギリス科の先生方、学生の皆様、教務補佐の松本さんにはご迷惑ばかりお掛けして日々大変恐縮しております。しかしながら皆様のお役にたてますよう、これからも精進いたす所存です。どうぞよろしく願いいたします。

「ニュージーランド留学体験記」

学部3年 小須田祐実

2016年7月から2017年7月までの一年間、ニュージーランドのオークランド大学に交換留学する機会をいただきました。留学の目的は、ニュージーランドという「周縁」の視点からイギリス帝国・コモンウェルスの歴史について勉強することと、ジェンダー論を学ぶことでした。女性史に興味があるため、世界で初めて国政での女性の選挙権が実現した国であるニュージーランドを選びました。

歴史の授業を中心に取り、ジェンダーの授業も各学期に一つずつ取りました。具体的には、ニュージーランド文化史、太平洋の歴史、セクシュアリティの歴史、医療社会史のほかに、ジェンダー論入門やフェミニズム理論、国際政治の授業を受講しました。歴史の授業をいくつか受けて一番印象に残っているのは、historiography について学んだことです。歴史研究とは過去の出来事をそのまま説明するものではなく、歴史家が過去の出来事を解釈するものであるということがよくわかりました。同時に受けている授業の内容を比較することで、社会史と文化史、フェミニスト的観点から書かれた historiography とその批判など、アプローチの違いにも気づきました。

学期中は、東大と比べて授業時間が少ない分、課題や予習に時間を割きました。自分の英語力不足を痛感し、ディスカッショ

ンへの参加や課題への取り組みが思うようにならず悩んだりすることもありましたが、オークランド大学の学生への手厚いサポート体制には感謝しています。ほとんどのレクチャーのスライドと録音はLMSにアップロードされるので、それを使って復習することができます。課題を進めるうえで困ったことがあると、Tutor や Lecturer に相談しました。レポートを提出する前に、構成について相談をしたり、添削をしていただいたりしました。ジェンダーの授業のレポートで使うポスターの画像の探し方に困ったときには、Lecturer に紹介していただき、図書館員に相談しに行きました。どの先生もとても親切に対応してくださいました。オークランド大学では、私のような英語が苦手な留学生に限らず、ローカルの学生にとっても、先生に相談することは珍しいことではないようです。

学習面以外でも、留学生活ならではの貴重な経験を楽しみました。留学生交流サークルに所属し、キャンパス内外での交流イベントに参加しました。特に、オークランド郊外の島への日帰り旅行やラグビー観戦イベントなどが思い出に残っています。金曜日や週末は友人と外で食事をしたり、一人で博物館や美術館、公園に行ったりすることもありました。オークランド博物館では、今まで勉強した授業の内容や、他の街で訪れた博物館との共通点・相違点などを思いだしながら、先住民族の文化についての展示や、19世紀のニュージーランド戦争に始まる国家が関わった戦争の展示を見ました。博物館の展示のほかにも、モニュメントや ANZAC Day のイベントを見かけると、第一次世界大戦（特に Gallipoli における ANZAC の犠牲）は、ニュージーランドの人々にとっていまだに重要な出来事なのだと感じました。セメスター半ばの短期休暇中は、ニュージーランド国内を旅行しました。田舎では湖や山など美しい自然が、都市では植民地としての歴史を感じさせる街並みが印象に残っています。長期休暇中は中国・香港やオーストラリアに旅行に行きました。イギリスの旧植民地として、歴史的建造物や街の通りの名前、公園、博物館の展示など、似ている点を見つけました。それぞれの国や都市の規模は違うものの、移民の多さや人々の多様性は共通点として挙げられると思います。オークランドでの普段の生活の中でも、多様化した社会で一人の人間として生きるとはどういうことか、友人との関わりや授業を通して考え、経験することができました。例えば、都市ではいろいろなアクセントで話す人々がいます。発音を向上させることは常に大事なことだと思っていましたが、「絶対的に正しいアクセント」というものは存在しないのではないかと感じました。

勉強面でもそれ以外の面でも、大変意義のある1年を過ごすことができました。留学中に感じたことや得たものを、今はまだどのように生かすことができるのかわかりませんが、これからの自分の行動につなげていきたいと思っています。英語のスキルを含め、これからも勉強を怠らずに続けていきたいです。



卒業生の今

「ニュージーランド滞在雑感」

北海道大学 原田真見 (40回)

北海道大学に勤務しております原田真見です。前期のサバティカルを利用し、5月から6月にかけてニュージーランドに行ってきました。ここ最近では、大学業務との折り合いの関係で、ニュージーランドには2月か3月に訪れることが多かったため、冬に突入する時期の南半球は久しぶり。

“Windy Wellington” が主な滞在地であったため、到着早々冷たい南風の洗礼を受け、「南の方が寒い」感覚を一気に取り戻しました。一か月ほどの滞在でしたが、それでもサービス付きアパートメントで自炊をしながらいつもよりは腰を落ち着けての生活となりました。

首都ウェリントンはこちらのまわりとしたきれいな街です。ひと頃は（ウェリントンに限った訳ではありませんが）通り沿いに

“To Let”の看板をあちこちで見かけることが多かったように記憶していますが、最近では景気も良く、少なくともメインストリートに目立った空き店舗はありません。どちらかと言えば観光のオフ・シーズンだったと思うのですが、それでも波止場や博物館に足を延ばせば地元の人たちに交じって明らかに観光客と思われる人たちがそれなりの数はいて、小さな街なりの活気が感じられます。また、“地元”の人たちは以前にも増して多様になってきています。2000年前後以降、特に東アジアからの数が増えています。依然として南アジアやヨーロッパからも流入があり、小国ながらじわり、と人口が伸びています。

ウェリントンに滞在中、平日は学生(?)のような顔をして図書館に通い、日曜日は観光客か地元民かわからないような風情で（と思っていたのは自分だけかもしれませんが）青空市に野菜を買いに行ったりスーパーで食材や日用品を買い足したりしていましたが、商店やスーパーのレジで働いているのはパケハ（白人）だけでなくインド系やアジア系の学生アルバイトや移民の人たちも多数。久しぶりに話すこちらの英語が日本語訛りであれば、あちらも各国語のアクセント付き、そうかと思えば肌の色に関係なく完全なキーウィ・イングリッシュを話す店員も多く、回りを飛び交う言葉だけ聞いていても実に様々な人たちが暮らしていることを改めて実感しました。

但し、ウェリントンに滞在中たった一度だけ、周囲にパケハしかいない、という状況になりました。ウェリントンを発つ前の日に、アパート近くのレストランでランチをしたときのことです。メインストリートから少し離れた高台寄りの立地で観光客も少ないということもあり、ビジネス・ランチによく使われるレストランだったようですが、食事中ふと気づくと周囲は8割方スーツ姿のパケハ男性、残り2割がパケハ女性で、その瞬間その空間に私はたった一人のアジア人になってしまいました。

南島の田舎町に行けばマオリも少なく、そもそもほとんどパケハしか住んでいないような所もありますが、ウェリントンでもやはり圧倒的にパケハ優位の空間があるということは、今更ながら、いえ今だからこそちょっとした驚きでした。その後足を延ばした繁華街のカフェでマオリ男性たちが大声で笑いながらビールを飲んでいたのはまたずいぶん対照的な風景として目に映りました。

そもそも、活気のあるウェリントンでも街中のスーパーの入り口脇の壁に日がな一日もたれかかって買い物客からの小銭を待っている人がいます。2011年の震災から少しずつ復興の進むクライストチャーチで

は、ザーザー降りの雨に半分濡れながら、改修工事中のビルの軒下に並べた寝袋にくるまっているホームレスを、早朝のバスの窓から見かけました。

ニュージーランドの文献を開くと egalitarianism という語をよく見かけます。平等主義はニュージーランド建国（白人移民がやってきて創った近代国家の意味で使っています）以来の重要な価値観であり、ニュージーランド・アイデンティティを問うときにもよく耳にするキーワードです。一方で、そんな平等主義が実は歴史の中で必ずしも理想的なカタチで実現してこなかったことや、現代の社会においてますますそれと矛盾する現象が生じている現実が日々様々なカタチで人々に突き付けられています。ニュージーランド随一の都市オークランドはウェリントンやクライストチャーチ以上に深刻な低所得者層の劣悪な住宅事情を抱えているとのこと。滞在中に読んだ新聞には、狭いアパートの一部屋に親子三人で暮らす移民一家の困窮が紹介されていました。これまで平等主義の名のもとに隠されてきた貧富の差が、新移民の増加とも相まって社会の目から覆い隠しきれなくなってきたと言えるのかもしれない。

何かと「人」に目の行く今回のニュージーランド滞在中でしたが、最後のおまけに立ち寄った南島で街を離れ長距離バスで牧場地帯を走っていると、都会で目にしたことも新聞で読んだことも、まるで別の国の話のように思われました。

．．．人々や街の様子を見るためだけでもまたちよくちよくこの国を訪れなければなりません。

「イギリスでの研究生生活」

Birkbeck, University of London

新広記 (46回)

ニューズレター前号の榊敦子先生による記事を大変興味深く拝読させて頂いており、国外で仕事をしているイギリス科卒業生の一人ということで寄稿の依頼を頂きました。未だ研究では四苦八苦ししている状況ですが、せっかくの機会ですのでイギリス科の思い出やその後の研究についてなど記してみようかと思います。

私は1996年に学士入学でイギリス科に入り、博士課程の途中でイギリスに留学するまで地域文化研究科に在籍しました。成田篤彦先生、木畑洋一先生、草光俊雄先生、

丹治愛先生などによる講義やゼミは、リラックスした雰囲気と学問への真摯な姿勢が同居したもので、イギリス科で学んだことは現在の自分の研究姿勢の根幹を形成することとなりました。夕方の旧 8 号館共同研究室では、パイプ煙草とコーヒーが香る中、学生同士の勉強会を行ったり、イギリスの話をしたりと、楽しくも有益な時間を過ごしました。

ケンブリッジ大学歴史学部博士課程への留学のために日本を離れたのは 2003 年でした。日常的に英語を使うという困難はあったものの、研究文献や理論に関する知識についてはイギリスでの研究レベルに大きな差を感じることはなく、イギリス科の先生方が基本文献と最先端の研究を授業でバランスよく取り上げて下さっていたことを実感しました。同時期に在外研究でケンブリッジにいらしていた草光先生には、公私に渡って引き続きお世話になり、先生のケンブリッジの友人たちとの会食やハイテーブルでのフォーマル、ご家族とのイタリア旅行に誘って頂いたり、一介の留学生ではできない体験をさせて頂いたことも感謝に堪えません。

ケンブリッジ大学では、修士課程で手をつけ始めたイギリス紙幣の文化経済史について研究を行いました。具体的には、18 世紀末の銀行券兌換停止が引き起こしたイギリスの社会変化に焦点を当てて論文を書きました。指導教官は王立歴史協会会長やトリニティ・ホールのマスターなどを歴任されたマーティン・ドントン教授で、マスターズ・ロッジで論文を指導して頂くなど、恵まれた環境で研究を進めることができました。博士論文提出後はイェール大学からフェローシップを受け、イギリス 18 世紀の文筆家・政治家ホレス・ウォルポールの資料を集めたリス・ウォルポール図書館（コネチカット州）で、今後の研究方向について考える機会を与えられ、アメリカでのイギリス史研究の雰囲気を体験できたのも貴重なことでした。

その後日本に戻り半年ほど非常勤で教えていましたが、その間も木畑先生や草光先生からは研究会に呼んで頂いたり、不幸なことに若くして他界なさった安西信一先生からは翻訳のアルバイトを頂いたり、イギリス科の先生方には継続的にご援助を頂きました。その後ドントン教授の勧めもありイギリスでの研究職に応募し、ヨーク大学でイギリス鉄道史に関するプロジェクトに携わることとなり、イギリス経済史を貨幣史とは違った角度から検討する機会を得ました。ただイギリスにおける鉄道史は非常に層が厚い分野で、セミナーともなれば生半可な知識ではとても太刀打ちのできないアマチュア歴史家が参加することも多

く、非常に苦労しました。ヨークでのもう一つの新たな体験として、私が携わったのがヨーク大学とイギリス国立鉄道博物館との共同プロジェクトであった関係上、博物館展示の計画に携わったり、ボランティアを含めた博物館員たちと交流することができました。この経験は、大学における研究とは違った意味で、歴史をパブリックな視点から考えるひとつのあり方を教えてくれたように思います。

2013 年、消費史で知られるフランク・レントマン教授と提出したプロジェクト計画が研究助成に採用され、マンチェスター大学そして現在の勤務校であるロンドン大学パークベック校で研究することになりました。副代表を務める「エネルギーの物質文化」プロジェクトでは、私は主にイギリスと日本においてエネルギー転換が日常生活にどう影響したのか、そしてエネルギー不足や供給途絶（停電など）がどのようなマテリアル・ポリティクスを生み出したのかを検討しています。またしても新たなテーマに首を突っ込んだわけですが、金融、交通、エネルギーという経済史の主要テーマを次々に見ていくことによって、最終的にはイギリスの経済史に対する自分なりの見解を生み出すことが長期的な目標です。

未だに研究者としては不安定な立場にありますが、エネルギー史と交通史で論文を発表しつつ、十年来の懸案である紙幣の歴史を単著として出版することが当面の課題です。とはいえ計画ばかりで筆は遅々として進まず、というのが実際の所です。現在イギリス科に在籍されている学生さんたちにはあまりよい見本とはなれませんが、苦闘しつつもイギリスで研究生活を送ることができているのは、イギリス科の先生方からの、在学中から現在に至るまでのご指導ご援助のお陰です。イギリス科関係者の皆様に感謝を申し上げ、筆を置かせて頂きます。



卒業生の方へ お礼とお願い

昨年のニューズレターの後、多くの方から御芳志を賜りました。紙幅の関係上、お名前を記すことができませんが、深く御礼申し上げます。当面、資金面での問題はなくなりました。

「イギリス科ニューズレター」は現在、紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記卒業生専用アドレス

[igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)

まで、送付先アドレスのご連絡をお願い致します。

また、お届けいただいているご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更などがある場合も、上記までご連絡をお願い致します。

2017 年度 イギリス科運営委員

西川杉子(主任)

小川浩之(副主任)、後藤春美(広報委員)、

中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子

松本佳奈子(教務補佐)、八代憲彦(教務補佐)

紙面作成

渡邊瞳(学部 3 年)